

不妊治療中に心理カウンセリングを利用した患者の主訴分析と心理に対するイメージ調査

◎松澤三奈1)、福田愛作1)、森本義晴2)

1) I V F大阪クリニック 2) H O R A C グランフロント大阪クリニック

背景・目的

不妊治療中の患者が心理カウンセリングを受ける事はまだ少ない。その理由の1つとして、「心理」という言葉そのものに対するイメージも影響していると考えられる。患者が過呼吸など顕著な症状をきたせば薦め易いが、日々の診療の中で薦め方に戸惑うという声も聞く。患者と直接関わりを持つ、どの部門のスタッフも気軽に心理の案内ができ、必要な患者が適宜受講できる環境を構築するために、表題の調査を実施した。

方法

イメージに関しては、患者アンケートに①カウンセリングのイメージ、②カウンセリングを受ける事に抵抗があるか、③今後受けてみたいと思うか、④自律訓練法をうけた事があるか、⑤質問③と④でのいいえの理由、の5つを加え分析した。

スタッフからもカウンセリングを推奨し易くする件については、その主訴を後方視的に分析し、患者がカウンセリングを必要とした状況を把握した。

結果

アンケートの回答数は65名(29%)であった。質問①の自由回答47件中、肯定的64%、否定的26%、②では「はい」20%、「いいえ」80%、③では「はい」72%、「いいえ」26%、④では「はい」62%、「いいえ」40%、⑤では自由回答20件中、肯定的80%、否定的10%、最も多い理由は「時間確保ができない」55%であった。

主訴は2018年度中に心理カウンセリングを利用した61名を分析した。最も多い主訴は「夫への不満」37%であった。

考察・課題

予想に反して肯定的イメージが多数を占めたのは、心理という言葉が精神科と異なり、患者の状態が病的ではないとの認識に基づいて薦められていると感じ、抵抗感が少ないのかもしれない。

主訴分析では、治療の状況を問わず推奨して問題ないと考えられた。時間確保については診療の待ち時間を当てた心理の利用も可能である。今回の調査結果を他部門と共有し、心理の潜在的希望者の受講を促し、患者のストレス軽減に繋げたい。